

作品解釈の経験的検証の可能性

林 敬

Die Möglichkeit der empirischen Überprüfung
der Interpretation

Kei Hayashi

はじめに

本稿は1984年10月に金沢で開かれた、日本独文学会秋季研究発表会におけるシンポジウム「文学の経験的研究の可能性」での、筆者の報告に加筆したものである。報告は Norbert Groeben の主宰した、Robert Musil の短編《Hasenkatastrophe》の解釈の、経験的方法による検証についてであったが、本稿では最初に1960年代後半に始まったドイツの文学研究の新たな傾向の中で、Groeben の研究のパーспекティブを簡単に位置付けし、それに準拠しながら、彼が構想し、具体的研究として主宰した、作品解釈の経験的検証の意味あるいは可能性を考察したい。

1. 転回点としての受容美学

周知のように、1960年代後半に入って、ドイツの文学研究の傾向に著しい変化が現われた。従来、文学研究は作品解釈にしる、文学史研究にしる、作者と作品が研究の対象であった。しかし、Hans R. Jauß や Wolfgang Iser たちが構想した受容美学ないしは受容理論などによって、文学史形成の場でも、また個々の作品の意味解釈の場でも、読者に対する視点が開かれたのである。⁽¹⁾ 彼等の受容美学を概観する前にその前史ともいべきものに触れると、この傾向の変化にとって、Hans G. Gadamer の解釈学の考え方が重要な意味をもった。「解釈者は同時代の作品に対しても、自己の解釈学的基盤から抽象的に離れることはできない」のであり、従って、歴史にとりこまれていた主観性あるいは主体を捨象した客観主義は修正されねばならないのである。これによって、文学研究においても、作品の理解の基盤そのものが問題とされ、さらに作品の現象学的側面、作品テキストの情報構造が問われるようになったのである。〔この面での先駆的研究としては、1930年に出版された Roman Ingarden の「文学的芸術作品」がある。そこで考察された文学テキスト理論や「具体化」(Konkretisation) の概念も、この時代になって再認識されるようになった。〕

Jauß の受容美学は作品の意味あるいは重要性を成立させる読者の機能に、また読者の主観とその背後にある超主観の関係に注目した。Jauß はそれをまず文学史の中に見た。彼の主張によれば、「文学の歴史性は、事後的に作り出された〈文学的事実〉の連関に基づくのではなく、読者による文学作品の移行的な経験に基づいている⁽³⁾」。というのは、文学的な生起は読者がいて初めて成り立つのであり、文学の生起的連関は同時代および後代の読者、批評家および作家がもつ「文学的経験の期待の地平」内で仲介されるからである⁽⁴⁾。このように Jauß は、文学史の中でそれまで受動的にすぎなかった読者の積極的な役割を見出し、読者の文学史形成へのかかわりを正当に位置付けようとしたが、その根底には作品の意味形成への読者のかかわりと、読者の理解の現象に対する洞察があったのである。

一方、Iser は、読者の作品への意味形成的かかわりを文学作品そのものの中に見出した。彼は、テキストは読者がいて初めて意味をもつ、という基本的見解に立ちながら、テキストは読者によってのみ意味付与されるだけではないことを考察した。作品は読書行為によって意味が具体化されるのであるが、「具体化の際に基礎となる主観性は、一方でテキストが与える条件を枠として働いている。つまり、テキストと読者とが収斂する場所に文学作品が位置している⁽⁵⁾」のである。このように考察しながら、彼はテキストを読者の相互作用に目を留めた。その構造的な中心部分と読者との関連でみたテキストの中の基本条件を大掴みにつないでいくと、およそ以下のようなになるだろう。— 虚構テキストは記号として提示されるが、もともと発信コードと受信コードは違っている。Iser の表現で言うと、テキストと読者は基本的に「非対称な関係」にある。これは状況の共通性や共通な関係枠の欠除から発生するのだが、これこそがコミュニケーション作用を起こす「空白」(Leere) ととらえられる。この「空白」を読者は自らを投影しながら埋めていく。そのとき、投影はテキストによって修正される。しかし、テキストはすべての読者を同じ方向に導いていくのではない。テキストの中には「空所」(Leerstellen) や「否定可能性」(Negationspotentiale) が用意されていて、それによってテキスト内のさまざまな分節の個々の読者に応じた結合が、さらに結合のコンテキスト(記号解読のコード)の反復修正的形成が、換言すると読者の経過的な意味構成活動が可能になるのである。

Jauß や Iser の受容美学は、視点を読者の側に転じることによって、文学研究の領域の拡大およびそれに対応する方法の探究を促した。読書行為、つまり読者の美的知覚や理解の現象面、作品の社会的機能、さらにテキスト構造に対する新たな理解などのさまざまな考察を文学研究の側から開いていった。従って、文学研究は従来の作品解釈の枠を越えて、社会学や言語学や心理学などの隣接諸科学との重なり(コミュニケーション理論、テキスト理論、数量化理論など)が必要になってきたのである。

2. 研究領域の拡大と経験的文学科学

1970年代に入ると、文学研究が領域の拡大とともに、未開拓な分野に直面したことにより、文学研究に対するマクロな関心が顕著になった。その中で、Siegfried J. Schmidt や Norbert Groeben は文学研究を経験的文学科学として位置付け、その理論的基礎の構築に取り組んだ。彼等はそれまでの文学研究やテキスト言語学、記号学、社会学、さらに科学論などの発展を踏まえて、「文学科学」の自己理解に達することを試みた。Schmidt の例でみると、彼は文学科学⁽⁷⁾

の科学性確保のための要請として、(a)間主観性、(b)明示性、(c)体系性を挙げた。文学科学はこのような要請に答える研究プログラムとして構成されなければならない。というのは個別的な理論や方法だけでは、元来科学的ということはできないのであり、また実際文学科学の課題を解決することもできない。この目的のためには相互に関係する一連の理論が枠理論として構築されなければならないのである。そして Schmidt の構想する研究プログラムは次のような特徴をもつ。— ①文学科学の対象、問題領域は社会的コミュニケーションの枠の中にある文学コミュニケーションの総体である。このことは文学現象がテキスト産出からテキスト解釈⁽⁸⁾に至るコミュニケーション行為ゲームとしてとらえられることを意味する。②従って、文学科学は一般テキスト学の枠内にあり、その枠内でテキスト産出と受容過程についての総合理論および部分理論が求められる。③それによって言語芸術作品が過程分析的に説明される。— 今や研究領域は従来のような文学作品の解釈や史的研究にとどまらず、文学研究は生産から受容への過程一般の科学へと拡大したのである。また、このような研究プログラムに基づく全体と部分の理論を理論枠として先に挙げた科学性は満たされるのである。ついでに言うと、ここには Schmidt の科学的真理観が現われている。つまり、体系によって間主観的に明示しようというのである。

以上のような研究プログラムによる文学科学では文学作品はコミュニケーション行為の物理的構成要素としてみられるわけだが、そのとき文学テキストは、そのような視点からみた構造的規則性をもつものとみなされる。文学作品とは何か、というような定義付けではなく、この規則性は、Schmidt の基本的思考図式を示しているのだが、文学テキストとそうでないものとの差異によって見分けられる。そのようにしてカテゴリー化された文字テキストの根本的メルクマールは「多機能性」、「多価性」、「状況独立性」である。(なお、Groeben はこれに「多解釈性」を加えている。)さらに、「文学テキストの構成要素はテキスト全体の構成の中に一義的に機能しつつ組み込まれているのではない⁽⁹⁾」のであるから、それゆえ、このようなテキストの意味は最終的に受容者によって構成される。従って、従来の解釈研究のように、文学テキストが受容者の個人的な経験状況や、たった一つの解釈体系に関係づけられるのは、テキストを美的テキストとして実現しようという課題には不相当と判断されるのである。

Schmidt は研究プログラムによって科学的であろうとして、コミュニケーション理論の枠内で文学テキスト産出から受容、作用に至るプロセス、および文学テキストのテキスト形態の一連の理論的枠組を構想した。ところで、それはちょうど真理の認識基盤に関する追求が無限であるように、理論の無限の更新のサイクルの中に自らを置くという一面、ある意味では危険な一面をもっている。つまり個別作品を離れたテキスト理論、受容理論、また、文学研究において、どのようなことが行なわれなければならないかということの、それ自体の研究目的化を前に、現実の具体的作品とその受容に関する研究がなかなか開始され得ないのである。それに対し、Groeben は、現実の受容者によって作品の意味がどのように具体化されるか、ということの観察をテーマとする経験化を構想した。もっとも、観察にも記述と説明のレベルがあり、従って観察方法とその有効性、および観察結果を説明するための理論が必要である。それについては、さしあたり現時点での理論構成で満足するしかないが、それだけに観察的方法は、具体的個別研究の実行と直接結びつくメリットがある。読者への視点の移行を契機とした経験的文学科学は、元來行為に関する科学である。それは Reinhold Viehoff が端的に表現しているように、

「文学過程への参加行為の構造と機能について、堅固で明確で検証可能な認識に達すること」⁽¹⁰⁾を課題としている。その認識はあらかじめ用意された説明図式に基づく批判的検査によって、「事実に真理」(faktische Wahrheit)として得られる。認識の真理性は、「有用な、説明の確率の点で適切な量の、実際の事実の観察によって得られた記述が、理論的言表を支持するとき保証される」⁽¹¹⁾のである。それゆえ、経験的研究においては、観察の実行が不可欠である。むしろ、観察によって理論が再構成されねばならず、その意味で理論と観察は絶えず相互作用の状態におかれねばならない。

Groeben の構想する文学科学は、従来の解釈学とテキスト言語学的経験化に対する関係によって特徴づけられる。まず、明証性 (Evidenz) に基本を置く hermeneutisch な解釈法に対しては、そこに主観と客観の混乱がみられるゆえに、十分客観的であり得ない、と批判する。さらに、研究対象領域の拡大と共に、明証性から間主観的経験性へ、パラダイムの転換がもたらされた、という見解に立つ。このこと自体は経験的文学科学の共通の立場である。しかし、Groeben は、Th. S. Kuhn の意味でのパラダイムの転換である限り、従来の認識関心も新たなパラダイムで説明可能でなければならないとする。従って、文学テキストの意味の次元が研究対象とならなければならない。その点、テキスト言語学的経験化は、テキストの物質的次元にとどまっており、不十分であるとその限界性を指摘する。文学作品の解釈は依然として幅広い関心の下にあり、基本的にパラダイムの転換によって、対象領域の縮小的限定があってはならないからである。そして、意味の次元は、受容者による具体化の観察によってのみ経験的把握が可能になる。といっても、この場合認識関心の対象はあくまで文学テキストであって、受容者にあるのではない。受容者は被験者として意味を媒介する機能をもっているだけである。

この経験化構想には、hermeneutisch な解釈法も意味解釈仮説の発見法として組み込まれる。⁽¹²⁾というのは、意味構成はそのような理論的解釈によって成し遂げられるからである。この場合、解釈法は一つに限定されない。hermeneutisch な解釈法 (form-analytisch, geistesgeschichtlich, marxistisch, psychoanalytisch etc.) は本質的にただ一つの正しい解釈を提示するが、受容の多様な可能性からみて、むしろ解釈の振幅 (Amplitude) が問題とされなければならないからである。そして、解釈法によって得られた解釈仮説は他の読者の理解と比較対照されて、技術的に言うと経験的観察方法による反証のフィルターにかけられて、はじめて経験的なものとなりうるのである。なお、Groeben の経験的文学科学の基本構造は次のように図示される。⁽¹³⁾

経験的文学科学	コミュニケーション科学として	
理論的構成 (発見法としての解釈法)	作品外在的 / (説明的) 構 成 物 作品内在的 / (記述的)	
経験的実在検査	形式、構造上の テキストの特徴 物質的テキスト相	具体化 / テクス ト加工 意味的テキスト相 客観的手続き

この構造内の中心的問題は、作品の解釈的意味の理論構成（解釈法）が間主観的に確定された作品の具体化（受容レベルの理解）からみて「適切」（adäquat）かどうか、ということの検証である。受容行為を受容段階と解釈段階に分け、それぞれに Textbedeutung（受容＝知覚レベルの意味）と Textsinn（解釈的意味）を対応させ、Textsinn の解釈法による解釈仮説を、具体化された Textbedeutung に照らして検証することが、Groeben の意味レベルの経験化の基本構想である。一般に理論的説明と観察結果の照合が経験的科学的特質であり、文学研究も科学として構想される限り、例外ではない。

3. 検証実験

本稿は Norbert Groeben: Rezeption und Interpretation. (1981) で発表された検証実験の概観と考察である。検証の対象となる解釈は、Robert Musil の短編《Hasenkatastrophe》の、4種類の hermeneutisch な解釈（form-analytisch, geistesgeschichtlich, psychoanalytisch, marxistisch）⁽¹⁴⁾である。検証のためのデータ収集の方法は、①cloze procedure（欠語補充）、アンケート、絵の提示による方法、②SD法、③分類とネットワーク形成法、⁽¹⁵⁾である。個々の検証実験を概観する前に、前提となる考え方を示したい。この実験は読者を被験者に用いて、検証対象の比較を可能にするデータの収集をした。それは、一つには文学テキストは多機能的（読者の側からすると多価値的、多解釈的）であり、読者が意味構成の決定機関、芸術作品の完成者である、というテキストコミュニケーション理論の考え方に立脚している。この考え方から読者の意味的次元での媒介機能が認定されるのである。他方、Textsinn のさまざまな解釈試みの前提には、Textbedeutung があるのだから、各解釈は Textbedeutung の上に成り立つものでなければならない。この2つの考え方から読者は意味が問題となる検証の被験者となりうるのである。検証実験は読者を被験者とする各方法で、テキストおよび各解釈仮説の受容データを得る。そして、⁽¹⁶⁾データの的に確定された Textbedeutung のモデルを比較して、「どの（読者によって受容された）⁽¹⁷⁾解釈構想が、（読者によって具体化された）文学テキストの意味に最も一致するか」を調査する。これによって、解釈法（Interpretation）に従った解釈仮説（Deutungshypothese）の「適切さ」（Adäquanz）ないしは「有効性」（Validität）が検証される。この検証は「正しさ」（Richtigkeit）の検証ではなく、「有効性の検証」（Validierung）である。（結果は、当然調査対象となった被験者グループにのみ妥当する。また、複数の方法による調査はそれだけ実験の確率を高くすると考えられる。）

3. 1. cloze procedure, アンケート, 絵の提示による方法

Faulstich の実験目標は、hermeneutisch な解釈が、読者のもとでどれくらい実在化されるか（tatsächliche Realisierung）、また了解されるか（plausibel）ということの検証である。cloze procedure は欠語補充の方法で、調査者はこれとアンケートの組み合わせが、読者のテキスト受容のデータの把握に有効と考えている。

（実験手続き）調査表は10項目の質問とテーマを示す絵から成り立っている。質問はテキストを読む前に答えるものと読んだ後に答えるものに分けられている。前半は物語の筋の部分（ア

ンケートによる)と理論的部分(cloze procedureによる)での期待傾向,およびテーマ的部分(絵の提示による)での大枠の認知傾向を調査するもので,間接的検証の意味をもっている。後半の中心は調査者自身のテキスト理解による意味付けと調査者によって取り出された各解釈のテーマ的意味付けから1つ選ばせる(該当するものがない場合には自由に意見を記入)ものと,各解釈の要約(そのうち,form-analytischな解釈とgeistesgeschichtlichな解釈はautobiographischな解釈として1つにまとめられている)について直接納得できるかどうか(3段階:完全,やや,否)を尋ねるものである。前者は直接間接的検証,後者は直接検証の意味をもっている。質問の作成は全体的に調査者の理解を前提としているのが特徴でもあり,客観性の点で問題でもあるところである。被験者は学生と有職者計35名,各質問に対する解答結果は百分率で示される。

(結果解析)前半の解答から,調査者は,筋(Handlung)の部分の期待はテキストに添っている。また,理論的部分での期待はテキストに添っていない,従って,このテキストの受容においては筋の部分が優勢で,理論的部分は理解されにくい,と読み取っている。しかし,被験者の3分の2は筋に潜在している意味を問う姿勢がみられる,と指摘している。テーマ的意味の認知的選択の結果からは検証対象となったhermeneutischな解釈は全体で12%の解答率であったので,まったく支配的でない判断される。直接検証では,被験者は大体において「やや納得」と「否」に分かれる。これは前記の質問の解答結果と矛盾するので,一応,解釈の影響による変化が想定される。しかし,各解釈に対する評価のコンビネーションを再検討してみると,そのことの信頼性が得られず(各解釈は対立的なので,どれか1つが納得されなければならないのに,そうでなかった),結局,調査者は解釈の影響というより,被験者のもともとの主観的関心や世界観が反映した,と判断している。

(結論)以上の検証により,「3つのhermeneutischな解釈は,具体的テキストの事実的受容(Konkretisation)との関連で,まったく意味が無いばかりか,読者にとって,極めて小数部分⁽¹⁸⁾でしか,“完全に”納得されうる,と思われなかった」と判定されている。

3. 2. SD法(Semantisches Differential)

Zobelは「hermeneutischな解釈はコミュニカートの意味の“適切な”仲介者であり得るか」ということを一応の調査目標にしているが,実験に先立って,極めて慎重にSD法の効力を限定している。彼は読者を被験者に用いたこの実験で,hermeneutischな解釈の反証(Falsifikation)や適切な解釈の選別はできないと,Groebenの考え方に異論を唱えている。彼の主張によれば,各解釈もSD法も,等価なコミュニカート加工であり,テキストの受容と解釈の受容の比較によって,一定の条件(ある被験者グループ,ある時点,ある場所)のもとで把握された意味モデルの近似程度がわかるだけである。従って,せいぜい意味の受容に関する予測ができるにすぎないというのである。

(実験手続き)SD法は簡単にいうと,いくつかの情緒的,評価的メルクマールに基づいて,被験者にテキストの評価をしてもらい,その評点を一定の統計的方法で処理し,結果を意味モデルとして図示して解析するものである。メルクマールは「社会的」—「非社会的」といった対極特性で表示されるが,この実験では28~32の特性が使用されている。これらの基本部分は,

この方法の創始者 Chales E. Osgood 等により考案され、すでに効果が認められたもので、受容状態を情緒的反応のレベルで観察するのに適している。実験ではオリジナルテキストと4種類の解釈が全体コンセプト (Gesamtkonzept) = 計算上の独立変数、と定められ、さらにいくつかのポイントで意味モデルが識別、比較可能となるように、部分コンセプト (Teilkonzept) が定められる。部分コンセプトはディスカッションによって、どの全体コンセプトにも共通するものが選出される。「作品に描かれている社会、小柄な女、語り手、自然、モード」の5つがそれである。被験者は約200名の学生で、5グループに分けられ、それぞれテキストか解釈のどれか1つを読み、各部分コンセプトについて、メルクマールに応じた7段階評価 (+3, +2, +1, 0, -1, -2, -3) をする。

(結果解析) 評点そのまま合計しても結果の意味モデルが複雑すぎる。従って意味モデルが比較しやすくなるように、メルクマールは因子分析法によって7つの因子(一般的価値、非現実性、倫理、活性、力強さ、関与気分、複雑性)にまとめられ、その平均値が求められる。さらにその平均値は視覚的に比較可能になるようにグラフで示される。このグラフの重なり具合で、テキスト及び各解釈の、被験者によって受容された意味の近似程度が判定できるのである。このような統計処理操作によって、調査者は以下のように結論している。① geistesgeschichtlich な解釈はテキストよりもポジティブに受容されている。② psychoanalytisch な解釈はテキストよりも悪く評価されている。③ marxistisch な解釈はテキストよりもよく評価されたり、悪く評価されたりしている。④ form-analytisch な解釈はテキストに最も似かよって受容されている。ただし、form-analytisch な解釈の受容がテキストの受容に最も似ているのは引用が一番多いせいということも考えられる、と留保されている。

3. 3. 分類とネットワーク形成法

Oldenbürger は、前提として、あるテキストの読者は、そのつど明瞭に意識しているわけではないが、受容の際に情報を加工する複雑なプロセスを実行している、このプロセスの結果はコンセプトの認知構造としてモデル化される、と仮定している。⁽²⁰⁾つまり、読者が重要と思うコンセプトの分類や関係し合うコンセプトのネットワークの形成によって、コンセプトの認知構造を直接的に把握し、テキストの認知レベルでの意味モデルとして具体的に表示しようというのである。

(実験手続き) 実験の最初の作業はコンセプトの収集である。これは協力者にオリジナルテキストをよく読んでもらってから、テーマ的あるいは内容的に重要と思われる語ないしは語の結合をあげてもらい、それを集計して選出する。この実験では16のコンセプトが挙げられたが、この個数は協力者1人当りの平均個数である。次に各コンセプトはカードに記入され、テキストあるいは検証対象の hermeneutisch な解釈のどれか1つと共に被験者渡される。この実験の被験者はコンセプトが16個なので、17名ずつ5グループに分けられた85名である。各グループの被験者はグループごとに割り当てられた、テキストか解釈のどれか1つを読んで、カードを使ってコンセプトの分類とネットワーク形成の作業をする。ネットワーク形成による方法は Oldenbürger が分類による方法をモディファイしたものである。被験者は関係があると思われるコンセプトを線で結んで関係づける。同様に分類法の場合は、文字通り関係の

あるカードをグループに分ける。

(結果解析) 各担当グループの17名によって関係づけられたコンツェプトの合計は三角行列で表わされる。この行列はクラスター分析法によって分析され、結果はテキストおよび各解釈ごとに2種類(ネットワーク形成法によるものと分類法によるもの)のネットワークで図示される。このネットワークの図表によって、テーマ領域の分かれ方や、どのコンツェプトがテーマ領域の橋渡しをしているか、が読みとれ、それによってテキストあるいは各解釈に基づくコンツェプトの認知構造の見当がつく。その結果、調査者は、①テキストに基づく認知構造は3つのテーマ領域に分かれ、それらを「野うさぎ」と「テリア」が橋渡ししている。② psychoanalytisch な解釈に基づく認知構造は、テーマ領域が崩壊しているのでの外れである。③ marxistisch な解釈に基づく認知構造は中心的テーマ選択の点ではテキストに極めて近いが、ここには橋渡しが無い、と解析している。さらに、調査者は統計処理によってテキストと各解釈相互の相関係数を求め、これによって hermeneutisch な解釈仮説の選択的評価が可能であると判断している。この相関係数の表から、認知構造的にはテキストと marxistisch な解釈の相関が極めて高いことが読みとられる。また、コンツェプトのテーマ的結合の、テキストおよび各解釈間の顕著な差をまとめた表から解釈の修正箇所(この実験では psychoanalytisch な解釈の「ヒロイズム」と「孤独」の関係の認知など)が明瞭に示唆される、とされている。

この検証実験からは、① marxistisch な解釈と form-analytisch な解釈が Musil のテキストのコンツェプト構造に最もよく一致している。② psychoanalytisch な解釈はテキストのコンツェプト構造からかなり外れている、ということが結論された。

3. 4. 総 合 判 定

以上の3つの実験に対して、Groebenは有効性の検証という観点から、検証の実験方法そのものと、検証結果の総合的判定をした。その際実験方法に関しては「cloze procedure, アンケート, 絵の提示」による方法に批判が集中した。①検証対象の解釈を要約で示したこと(これについては、解釈の分量が膨大であることから、実際の見地に立って被験者に耐えられる量に要約されたのだが、比較のための意味モデル化を実験担当者が手助ってしまったことになり、そこに実験担当者の主観の混入の余地が生じた)。②被験者がオリジナルテキストと解釈に振り分けられなかったこと(このことは解釈の影響測定の意味はあるが、テキストと解釈の受容の比較による検証意図からは外れている)。この2点から他の2つの実験結果と比較できないし、結果自体にも制約がある、と判定している。それに対し他の2つは、主観—客観—分離(Subjekt-Objekt-Trennung)という局面でも適切であり、実験の目的に添う方法と判定された。さらにこの2つはカバーする領域(情緒的反応レベルと認知的レベル)が相互補完的なので、併用がより有効とみなされた。

一方、Groebenは3つの実験の過程からみて、実験の性格が選択的有効性の検証から非有効性の検証に変化したことを指摘し、反証(Falsifikation)への変化と位置付けた。この検証実験の性格の変化を考慮に入れて、4種類の解釈仮説に対しては、psychoanalytisch な解釈法による解釈仮説がどの方法によっても「適切でない」(nicht adäquat)と判定された、と結論している。(なお、cloze procedure, アンケート, 絵の提示による方法の実験結果については、

Groeben はデータを読み替えて、実験担当者と違った結論に達している。また、form-analytisch な解釈は、引用の問題で SD 法の判定からは除外している。）

3. 5. 検証実験の問題点

この検証の基本的問題は、やはり読者を被験者に使うことの正当性と、「適切な」ないしは「有効な」(valid) という判定指標の意味である。いくつかの技術的問題も、結局この問題から派生している。

form-analytisch な解釈と geistesgeschichtlich な解釈を担当した Heydebrand は、受容者の能力を問題にして、結果に対して不信感を表明している。つまり、学生のような訓練途上の被験者のもとでは、不慣れな見方は多数から受け入れられず、その結果は「適切でない」という判定につながるのではないかと、例えば、psychoanalytisch な解釈はそのことを示していないか、というように被験者側の条件による結果の差に対する危惧をあげている。言い換えると、結果は被験者の能力的条件の反映であり、その意味で彼女にとっては、この種の実験は、解釈の検証よりもむしろ読者調査に向いていると思われるのである。確かに、最初の実験は特にこれに該当している。この調査はさまざまな段階の要約、つまり調査者の理解に導かれながら、読者がどのようにテキストの意味を具体化するかの調査であって、各解釈はその過程で要約の形で意味形成の材料に使われている。そして、その利用のされ方で間接的に被験者に受け入れられるか、受け入れられないかの検証が行なわれている。そのとき、解釈の要約に対する読者の理解が前提になっており、従ってそこでは読者の理解力や慣習的なもの、思想傾向、その他諸々の解説が与えられるか否か、などの諸条件が問題とならざるを得ない。実験の結果（間接検証と直接検証の時の変化。この時この変化は被験者の主観に帰せられた）もそのことを示している。これらの事情から、検証結果は被験者グループの条件によって大きく左右される可能性がある。一方、読者調査としてならそのことは問題がない。

順序は逆になるが、さらに Heydebrand はそもそも解釈が「適切」か否かは歴史のおよび社会的背景のもとに問題になりうる、と主張している。この意味ではないが、「適切さ」の問題に関しては、Zobel も先に触れたように慎重な見解を示している。要するに彼は SD 法による調査は、ある被験者グループ、ある時点、ある場所という条件下のコミュニケーション加工の一つであり（これは、読者を被験者に用いた検証実験の結果の評価の問題にも関係する）、「適切さ」の判定のためのより高い価値の公準 (Postulat) を導くものではない、と限定している。従って彼は反証という表現も避けている。逆にこのことから推論すると、Zobel は「適切さ」という指標を、上位の公準（それが何かは明らかでないが）に照らした「適切さ」の意味に考えていると思われる。

「適切さ」の問題については、Groeben は作品の意味構成の読者の機能を踏まえながら「適切さ」の指標としての意味を確定している。先に Groeben の研究構想を概観した時の図式には含まれていないが、別なところのより詳細な図式⁽²¹⁾では、彼はテキストの知覚レベルの意味 (Textbedeutung) と解釈の意味 (Textsinn) を区別し、それに対応して受容 (Rezeption) と解釈法⁽²²⁾を分けている。それぞれのレベルでの具体化手段は SD 法などの観察方法と解釈法である。このような区別に立って彼が検証に関して基本的に考えていることは、Textsinn のさ

さまざまな解釈試みの前提には Textbedeutung の受容があるのだから各解釈は Textbedeutung の基礎の上に成り立つものでなければならない。従って方法的に正しく把握された Textbedeutung は解釈の外部規準 (Außenkriterium) になりうる, ということである。それゆえ, 彼の場合, Textsinn の解釈仮説が「適切」かどうかと言うことは Textbedeutung に照らして, 「適切」かどうかという意味で, さらにこの判定の適用範囲は被験者グループ, ということになる。

Groeben は Heydebrand が提出した疑問には直接答えていないが, 上記の見解からそれに対する解答が引き出せる。まず, 被験者の理解力の問題だけに関しては, あくまで被験者グループにとっての解釈の「適切さ」の検証と限定すれば, 結果の適用範囲も限定されるから, その範囲内では理解力の差が問題になることはない。残るのは検証の適用範囲の問題で, これは, 共時的および通時的に一般化する必要があれば, 調査技術的問題となる。もっともこれは簡単ではない。「適切さ」の問題に関しては, もしその意味を Heydebrand の意味にとれば, 別な実験が組織される必要があるということである。

ところで, 読者の検証実験の被験者としての機能も, 判定指標の意味とセットで考えられれば, 確かにその範囲内では一貫性があり, 問題点はなくなる。テキストから被験者によって直接具体化された Textbedeutung と, 解釈仮説から, やはり被験者によって具体化された Textbedeutung が一致するということが, 「適切」という表現に合致するかどうかはともかく, 「適切」という表現の意味を, そのようにとり決めようというのなら, その限りで問題はない。しかし, 解釈がある読者グループにとってこの意味で (厳密に言うと相対的に) 「適切」かどうかということの検証は可能には違いないが, 例えば Heydebrand の疑問からも窺えるように, 検証の内容に対する期待からの後退である。というのは, form-analytisch な解釈を例にとると, それはいろいろな意味での評価とは無関係に, 有利な検証結果が出る可能性があるが, そのことはその解釈が作品のある面での意味を正確に伝えているから, というにすぎない。それゆえ, 検証をそのように, いわばテキストに対する密着度に限定してしまうことは, 文学研究総体の中で, その重要さが改めて問題になるだろう。作品もまた社会の中で, あるいは文化の中で生きているのであれば (それゆえ, それぞれの立場からの解釈の試みがあるのだが), 解釈のどのレベルが検証に値する事柄なのか, 作品の意味の総体の中でまず明らかにされる必要がある。その上でさまざまなレベルの検証が考えられるべきであろう。

おわりに

経験的文学科学はまだ10数年の歩みをもつにすぎない。それは, パラダイムの転換であるにしろ, そうでないにしろ, 確かに文学研究の新たな地平を切り開こうとしているが, まだ予備的研究段階にとどまっており, 十分な具体的研究成果をみていない。しかし, 一つには文学研究が作品研究のみに限定されていたあり方から踏み出して, 社会の文学的事象一般の説明の科学として, 間主観的学際的研究をめざすことに, 文学研究の科学としての新たな可能性が期待されるように思われる。他方, それは作品研究の領域でも, より厳密な学への刺激となるように思われる。

註

- (1) Jauß, H. R. : Literaturgeschichte als Provokation, 1967.
Iser, W. : Die Appellstruktur der Texte, 1969.
年度はコンスタンツ大学就任議義として発表された年を示す。轡田 収氏は1967年をドイツにおける文学研究の転機を印象づける年としている。(H. R. ヤウス著, 轡田 収訳「挑発としての文学史」あとがき291ページ)。
- (2) H. R. ヤウス著, 轡田 収訳 同上書 287ページ参照。
- (3) Jauß, H. R. : Literaturgeschichte als Provokation. S. 171.
- (4) 同上書, S. 173.
- (5) Iser, W. : Der Akt des Lesens. S. 38.
- (6) 同上書, S. 262, 263.
- (7) この要約は主として Schmidt, S. J. : Elemente einer Textpoetik (「テキスト詩学の原理」)に拠っている。
- (8) 同上書, S. 28, 29 の図表参照。
- (9) 同上書, S. 41.
- (10) Viehoff, R. : Empirisches Forschen in der Literaturwissenschaft. (In : Literaturwissenschaft und empirische Methoden. 1981) S. 12.
- (11) 同上書, S. 13, 14.
- (12) この考え方は R. Viehoff も支持している。
- (13) Groeben, N. : Rezeptionsforschung als empirische Literaturwissenschaft. S. 11.
- (14) Renate von Heydebrand : Versuch einer form-analytischen Interpretation (22 Seiten)
Renate von Heydebrand : Geistesgeschichtliche Argumentation (10 Seiten)
Klaus-Dieter Schliier : Psychoanalytische Interpretation (14 Seiten)
Elmar Locher : Marxistische Interpretation (4 Seiten)
- (15) Werner Faulstich : Empirische Konkretisationserhebung unter cloze procedure, Frage und Bildblattvorlage.
Reinhard Zobel : Textverarbeitung und semantisches Differential.
Hartmut-A. Oldenbürger : Zur Konkretisationserhebung literalischer Texte und hermeneutischer Deutungshypothesen durch Sortierung und Netzwerkbildung.
- (16) Groeben の計画では, 等質な被験者を2グループに分けて調査を行なうものとしている。但し, 最初の実験では分けられなかった。
- (17) Groeben, N : Rezeption und Interpretation. S. 21.
- (18) 同上書 S. 107.
- (19) Konzept という用語は作品からの刺激によって頭脳の中に生じたものを表わしている。(同上書 S. 122 参照)。しかし, 実際上は登場人物および観念を総称的にさしているので, 訳語でなく, コンツェプトとそのまま表音表記することで統一したい。
- (20) ここでの Konzept は部分コンツェプトの意味である。
- (21) Groeben, N. : Rezeption und Interpretation. S. 15.
- (22) Schmidt の場合だと, これはコミュニカート受容とコミュニカート加工ということになる。

参 考 文 献

- Groeben, Norbert : Literaturpsychologie. Stuttgart, 1972.
- Groeben, Norbert : Rezeptionsforschung als empirische Literaturwissenschaft. — 2. überarb. Aufl. — Tübingen, 1980.
- Groeben, Norbert (Hrsg.) : Rezeption und Interpretation. Ein interdisziplinärer Versuch am Beispiel der "Hasenkatastrophe" von Robert Musil. Tübingen, 1981.
- Iser, Wolfgang : Der Akt des Lesens. München, 1976. (轡田 収訳「行為としての読書」. 東京, 1982)
- Ingarden, Roman : Das literarische Kunstwerk. 4. Auflage. Tübingen, 1972. (瀧内慎雄・細井雄介訳「文学的芸術作品」. 東京, 1982)
- Jauß, Hans Robert : Literaturgeschichte als Provokation. Frankfurt am Main, 1970. (轡田 収訳「挑発としての文学史」. 東京, 1976)
- Schmidt, Siegfried J. : Elemente einer Textpoetik. München, 1974. (菊池武弘・今泉文子訳「テキスト詩学の原理」. 東京, 1984)
- Viehoff, Reinhold : Empirisches Forschen in der Literaturwissenschaft. In : Literaturwissenschaft und empirische Methoden. Göttingen, 1981.
- Wolff, Reinhold/Groeben, Norbert : Zur Empirisierung hermeneutischer Verfahren in der Literaturwissenschaft. Möglichkeit und Grenzen. In : Literaturwissenschaft und empirische Methoden. Göttingen, 1981.
- 轡田 収, ドイツ文学研究の方法論 : ドイツ文学66. 東京, 1981.
- 轡田 収, H. R. ヤウス著・轡田 収訳「挑発としての文学史」あとがき. 東京, 1976.